

どうして日本人は英語が苦手なのか？

どうして中高6年間も英語を勉強したのに、
英語がしゃべれないのか？

日本人に適した英語の学習法はないのだろうか？



【CLAメソッド】

~英語成功者【187名】の成功学習パターンから抽出した究極の「大人英語」正攻法~



- eigo-manabu.jp implements CLA method.

4th Edition (revised on 7/27/2015)

<目次>

第1章	はじめに.....	6
1.1	研究概要.....	6
1.2	問題設定.....	6
1.3	論文の構成.....	7
第2章	第二言語習得研究における前提となる知見.....	9
2.1	臨界期.....	9
2.2	なぜ日本人は英語が苦手なのか？.....	11
2.3	どんな英語学習者が成功するのか？.....	14
第3章	CLAメソッドとは.....	22
3.1	CLAメソッドの定義と早見表の提示.....	22
3.2	CLAメソッドにおける独自の3つの特徴.....	25
第4章	CLAメソッドにおけるListening Sectionの裏付け	30
4.1	Listening Section における早見表の再提示.....	30
4.2	2.3の方略10と方略11との整合性.....	32
4.3	【段階1. フィルター段階】.....	33
4.4	【段階2. リスニングの”基盤”作りの段階】.....	39
4.5	【段階2. リスニングの”基盤”作りの段階】の手法について.....	44
4.6	【段階3. 音変化への”慣れ”】.....	49
4.7	【段階4. 理解段階】.....	51

第5章 CLAメソッドにおけるSpeaking Sectionの裏付け 54

5.1 Speaking Sectionにおける早見表の再提示	54
5.2 2.3の方略16～23との整合性	56
5.3 【段階1. 舌作りの段階】	58
5.4 【段階2. 行動主義的手法から構成主義的手法への移行段階】 ...	59
5.5 【段階3. さらなる流暢さと機転の利いた会話】	61

第6章 CLAメソッドにおけるReading Sectionの裏付け .63

6.1 Reading Sectionにおける早見表の再提示.....	63
6.2 2.3の方略12～15, 24～26との整合性	64
6.3 リスニングとリーディングの関連性	65
6.4 【段階1. 基礎語彙力と文法構文の習熟段階】	67
6.5 【段階2. 文字と音(内語)のつながりの強化段階】	67
6.6 【段階3. 多読段階】	68

第7章 CLAメソッドにおけるWriting Sectionの裏付け ..69

7.1 Writing Sectionの早見表の再提示	69
7.2 2.3の方略27～31との整合性	70
7.3 【段階1. 基礎語彙力と文法構文の習熟段階】	71
7.4 【段階2. 英借文の習熟と添削】	72
7.5 【段階3. Readingからの転移】	72

第8章 EMによるCLAメソッドの実践とモニター評価 .74

8.1 EM (eigo-manabu.jp) とは.....	74
8.2 CLAメソッドの実践によるケース別モニター評価	76
第9章 おわりに.....	92
9.1 まとめと結論.....	92
引用・参考文献.....	93
書籍（和文）	93
雑誌論文（和文）	94
欧文文献.....	94
インターネット資料・その他	94
巻末資料.....	95
CLAメソッド早見表一覧.....	95

第1章 はじめに

《キーワード》

CLAメソッド EM 第二言語習得研究 純ジャパ 方略 仮説

1.1 研究概要

本研究では、第二言語習得研究の知見から独自にCLAメソッド（Classified Language Acquisition Methodの略称）を構築する。そのCLAメソッドが、どのような知見に基づいて裏付けられ、どのような独自の特徴を持っているかを明らかにすることが本稿の目的である。また、CLAメソッドの実践の形として、eigo-manabu.jp（以下EMと呼ぶ）というウェブサイトを開設した。そのEMの活用例についても随時触れていく。本研究では、「純ジャパ」¹の英語学習時における、1つの効果的な言語学習方略²として、CLAメソッドを提案する。

1.2 問題設定

■ 研究の背景

以下の3つが、今から11年前（2001年）に本研究を始めた原点となる問題意識である。

「どうして日本人は英語が苦手なのか？」
「どうして中高6年間も英語を勉強したのに、英語がしゃべれないのか？」
「日本人に適した英語の学習法はないのだろうか？」

この3つの問題意識については、「留学すれば英語が自然に使えるようになる」という幻想を抱いたまま留学し、英語の壁に何度も対峙しなければならなかった留学時に、生活に関わる緊急かつ重要な問題として特に意識せざるをえなかった。そこで、インターネット上や、学術的なデータが乏しい個人体験のみに基づいた書籍で紹介されていた英語学習法を何度も試し、失敗を繰り返し、結局、第二言語習得研究へ「正しい英語の学習方法」の解答を求めるようになった。それが、CLAメソッドが生まれるに至った経緯と、その動機である。

¹ 純粋なジャパニーズの略。日本で生まれ、日本語を母語としながら、日本の初等・中等教育の中で育った人の総称を指す。「純粋」という表現は、単に帰国子女（幼少期を海外で過ごしたのちに日本に帰国した人）ではないというだけの意味しか含まれておらず、文化民族的意味合いは特別に含意しないものである。

² Language Learning Strategyの日本語訳。情報の利用や取得、保存、検索を補助する際に活用する方法（Operations employed by the learner to aid the acquisition, storage, retrieval, and use of information. (Defined by Oxford)）。

また、社会的な文脈においても、世界規模でのグローバル化が趨勢である昨今、英語の重要性が増していることは言うまでもない。2010年から楽天における、英語の社内公用語化が始まり、ユニクロを傘下にもつファーストリテイリングもそれに追随する形で英語の公用語化を推進した。また、楽天、ファーストリテイリングだけに限らず、パナソニックなどの大手企業も、外国人の新卒採用が年々増加しており、様々な文化背景や言語を使用する従業員が増加傾向にある。このように社内が多文化化、多言語化する中で、お互いの価値観を認め合い、意思疎通を図るツールとしても、英語の使用の重要性が再認識されつつある。さらに、2011年4月より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」（原則として英語）が必修化された³。

このような流れを考慮すれば、今後さらに、日本においても、あらゆる分野で英語化が進み、それに伴って、日本人がより効果的に英語を学習する方法がますます求められてゆく状況が容易に予測される。

■ 問題と仮説の提示

先に提示した3つの問題意識に潜む共通の心理は、「純ジャパでも本当にペラペラになれるのか？」ということである。言い直せば、「純ジャパにとって、英語が自由に使いこなせるようになるための、効果的な学習法は存在するのであるだろうか？」という問題に収斂することになる。

その問題に対する、1つの解答・解決案として、CLAメソッドを提案する。つまり、「CLAメソッドは、純ジャパにとって英語が上達するための効果的学習法になりうるのではないか？」を検証されるべき仮説として提示する。

すでに、CLAメソッドは、筆者自身の英語学習を通して効果は確認されている（CLAメソッドにより、センター試験平均点以下の文法中心の片言英語レベルからTOEIC 980点／990点中、TOEFL iBT 99点／120点中のレベルまで向上）。ただ、自身での実験結果だけでは、CLAメソッドだけの効果であるとは言い切れず、その客観性・再現性・反証可能性・汎用性が乏しいことは認めざるを得ない。であるから、本研究を通じて、CLAメソッドの理論的裏付け、ならびに、CLAメソッドを実際に利用してもらったモニター評価を通じて、その信頼性を確保していく。

1.3 論文の構成

論文の構成は以下の通りである。

まず、次章の第2章では、CLAメソッドを理解するために前提となる第二言語習得研究における知見を紹介する。

第3章では、CLAメソッドの定義、そして、その3つの特徴を中心に、具体的にCLAメソッドについて詳述していく。

³ 文部科学省 小学校外国語活動サイト http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/index.htm

第4、5、6、7章では、CLAメソッドの4つのセクション（Listening, Speaking, Reading, Writing）において、第二言語習得研究の知見からCLAメソッドの裏付けを順次行っていく。ここまでの論述により、CLAメソッドの内容を説明・裏付けし、純ジャパとの関連性、純ジャパへの効果の妥当性を学術面から示す。

第8章からは、その実践として、EMの説明、モニター評価について記述し、CLAメソッドにおける一定の客観的信頼性の確保を試みる。

第9章で、先に提起された問題・仮説に対する解答として、CLAメソッドの妥当性を再検討し、本稿のまとめとする。

第2章 第二言語習得研究における前提となる知見

《キーワード》

臨界期 動機付け 態度 方略 31の方略と5つの示唆

2.1 臨界期

■ そもそも大人になっても英語習得は可能なのか？

具体的にCLAメソッドの詳述に入っていく前に、そもそも大人になっても英語ができるようになるのか、という疑問を解消しておく。なぜなら、その理解がない状態、つまり、「大人である自分は英語習得ができないのではないか？」という不安がある状態は、中長期的学習意欲／動機付けという点において、障害となってくる可能性が高いからである。

臨界期仮説は、竹内(2003)によると、「思春期のはじまり（12～13歳⁴）の時期をすぎると、ネイティブのような言語能力を身につけるのは不可能になる」という仮説である。つまり、思春期を越えた、いわゆる「大人」にとって、英語はそもそも習得可能なのかどうか、という点について、主に2つの先行研究を参照しながら考察していく。

1つ目の先行研究は、白井(2008)によるものである。白井(2008:39)は、ジアらの2002年の論文の研究を論拠として、第二言語学習には、年齢要因よりも、むしろ、環境要因の方が強く影響していると主張している。

このジアらの研究では、アメリカへ移住した人のアメリカ到着時の年齢と英語能力の関係を調べ、それをヨーロッパ系グループ（主にロシア語を母語とする学習者）とアジア系グループ（北京語、広東語、韓国語を母語とする学習者）に分けて比較している。彼らの英語能力の伸びに関して、ヨーロッパ系学習者には統計的に有意な年齢の影響がなく、アジア系学習者にだけ有意な年齢の影響が見られた。

もし、臨界期の原因が脳の構造によって決まっているのであれば、同じ影響が全人類にあるはずであって、アジア系だけに年齢の影響があり、ヨーロッパ系にはない、という現象は正鵠を得ない。いわば、年齢よりも、学習者の心的態度を含めた環境の方が強く影響している、と白井(2008)は結論づけている。

⁴ 白畑(2004)によると、発音に関しては、7～8歳という説もある。

2つ目の先行研究は、竹内(2003)によるものである。竹内(2003:9)によると、臨界期 (Critical Period) を学術的に主張し始めたのは、Penfield & Roberts(1959)やLenneberg(1967)であり、Penfield & Robertsは臨界期の上限年齢を9歳前後まで、Lennebergは思春期頃まで、と主張している。

臨界期の考え方は、厳密な実験で立証することが不可能なため、臨界期「仮説」 (Critical Period Hypothesis: CPH) という名称で呼ばれており、絶えず議論の対象となり、賛否両論のデータが提供され続けている。

竹内(2003)は、CPHを支持するデータを概観した後に反証を試み、結論を導き出している。ここでは詳細には立ち入らず、簡潔に、どのようなデータを分析対象としたのかを取り上げ、結論を明示したい。

例えば、発音や聞き取りの習得に関するOyama(1976,1978)の研究、発音や文法の習得に関するPatkowski(1980,1990)の研究、文法習得に関するJohnson & Newport(1989)の研究、さらには、普遍文法⁵ (Universal Grammar: UG) の習得に関するCoppiters(1987)やJohnson & Newport(1991)の研究などが挙げられる。また、竹内(2003:25-27)は、34に渡るCPHに関する研究を検証し、CPHを支持する学説と支持しない学説が入り乱れており、CPHが未だ実証されていないことを強調している。

以上の研究の分析の結果、外国語学習には、年齢以外にも多くの要因が関与しており、それらの要因のあり様次第では、思春期以降に外国語の学習を開始しても、相当に高いレベルに達する可能性が十分にあることがわかった、と主張している。

以上の2つの先行研究からも分かるように、CPH自体は立証されておらず、未だ仮説のままであり、むしろ、年齢よりも、他の様々な要因、特に、環境要因が英語学習に強い影響を及ぼしていると言える。しかしながら、7歳を期にネイティブレベルの発音がほぼ不可能になるというJohnson(1992)や白畑(2004)の研究も統計的に有意を示しており、その点は考慮すべきである。ただし、それは、臨界期以降の学習者の学習到達度の低さを示すものではなく、ネイティブに近いレベルまでならば到達可能であるという示唆も含んだデータである。

また筆者(足立)も、臨界期を確実に過ぎた、成人(20歳)以降に、片言の英語レベルから比較的スムーズに英語でコミュニケーションが取れるレベル (TOEIC 980点/990点中、TOEFL iBT 99点/120点中) まで到達したことを考えれば、直観的にも、白井(2004:32)の言う「Older is faster, younger is better」 (年齢を重ねるほど学習が早くなり、若いほど発音が良い) という一般化に含意された、「大人になっても言語習得は可能であり、それどころか、むしろ、大人の方が言語習得自体は早い」という点にも納得がいく。さらに次節で紹介する、「大人」になった後に学習を開始した英語学習成功者らの存在も、その一般化の主張に対する確かな論拠である。

以上より、CPH自体は完全に実証されておらず、「大人」になっても、ネイティブレベルとまではいなくても、かなりのレベルまで英語能力を向上させることが可能であると結論づけられる。

⁵ 全人類に共通な言語の源。人間には生まれつき文法的に正しい文を生み出す能力 (生成文法) があり、それはその言語の演算装置のようなものと考えられており、どのようなタイプの言語であれ、ここから生成される。(ジョンC.マーハ:2004) 米ハーバード大学の言語学者ノーム・チョムスキーにより1957年に提唱された。(伊藤サム:2003)

2.2 なぜ日本人は英語が苦手なのか？

2010年のTOEFL iBTの国別平均点は、参加人数比率は各国でばらつきはあるもののアジア30カ国中、日本は下から4番目の26位だった⁶。また、ほとんどの生徒が中学高校の6年間、英語を学習するにも関わらず、この20年間TOEFLの点数が向上しておらず(白井:2004)、日本人が英語ができないという事実を受け入れざるをえない。なぜできないのだろうか。

以下の5つの理由が考えられる。

理由1： 弱い動機付け
理由2： 言語間の距離
理由3： 周波数の距離
理由4： 日本人の国民性／恥の文化
理由5： 文法偏重の中等英語教育

■ 理由1：弱い動機付け

シンガポールやフィリピンなど、英語が生活の一部にとけ込み、公用語となっている国と違い、英語ができなくても基本的に日本で生活には困ることはない。先に述べたような日本社会における英語公用語化／グローバル化の流れも、受験や留学、就職や昇進に有利であるというレベルでの必要性を助長してはいるものの、「英語が絶対に必要である」という社会的要請を日本での生活者につきつけるまでには未だ至ってはいない。

■ 理由2：言語間の距離

当然の話ではあるが、言語が似ていれば似ているほど、その習得難易度は低くなる。例えば、韓国語と日本語の文法的な語順がほとんど類似しているという点で、日本人にとって英語に比べ、はるかに韓国語の方が学びやすい。同様に、ドイツ語など、英語と同じインド＝ヨーロッパ語族に属する言語を母語とする学習者にとって、英語は非常に親しみやすく学びやすいが、日本語や韓国語習得における難易度は高いと言える。

白井(2004)によると、カーネギーメロン大学の甲田慶子は、日本語学習者を韓国語、中国語、英語の3つの母語グループに分けて、学習進度を比較した。すると、初期段階ですでに、英語話者は韓国語話者・中国語話者に差をつけられて、しかもこの差は学習が進むにつれてさらに広がる、という結果が出た。

このように、母語と対象言語の間の距離によって、習得難易度は左右されるので、日本人は英語ができないことを恥じる必要はそれほどない。むしろ「元々、言語的に不利だからしょうがない」と開き直って英語に取り組むことで、モチベーションを維持しながら学習を進められるのではないだろうか。

⁶ ETS TOEFL(2010). Test and Score Data Summary for TOEFL Internet-based and Paper-based Tests. January 2010-December 2010 Test Data.

■ 理由3：周波数の距離

言語がそれぞれ持つ周波数（Sound Waves）の距離が原因で、日本人が英語が苦手であるという主張もある。しかし、この理由はいささか疑問が残る。

イギリス英語は2,000ヘルツから12,000ヘルツの周波数を持っているのに対し、日本語は125ヘルツから1,500ヘルツの周波数であり、両者の周波数はまったく重ならない。このために日本人は英語が苦手である、という主張に対し、白畑(2004)は疑問を投げかけている。

TOEFLのリスニング部門のスコア（Paper-based） From ETS(2001)

母語	リスニング部門
ドイツ語	61
スペイン語	57
ロシア語	55
イタリア語	54
フランス語	51
日本語	49

もし、周波数の違いにより英語の聞き取りの困難度が説明できるのであれば、英語に近い周波数をもつ言語を母語とする学習者の聞き取り（スコア）が良いことになる。上図のTOEFLのリスニング部門のスコアと周波数の関係を見ると、イタリア語はスペイン語に比べてイギリス英語に近い周波数を持っている。（イタリア語：2,000~4,000ヘルツ、スペイン語：125~500ヘルツと1,500~2,500ヘルツ⁷）。しかし、TOEFLの点数では、スペイン語話者の方がイタリア語話者より成績が良い。また、ロシア語は、125~10,000ヘルツと、かなりの周波数をカバーしているので、英語のリスニングに問題がないと考えられる。しかし、実際はロシア語話者のTOEFLの成績は、スペイン語話者に比べて良くない。したがって、母語との周波数の違いのみではリスニングの力の差を説明することができない、と白畑(2004)は主張している。

たしかに、白畑の主張は的を得ているが、周波数の違い自体は看過されるべきではない。なぜなら、「言語が聴こえ、理解できる」という現象は、音声の知覚自動化プロセスと、その音声を理解するプロセスから構成されており（第4章で詳述）、前者のプロセスにおいて周波数が違うことは意味を有する可能性（音声の知覚プロセスにおいて重要な役割を果たす可能性）を否定できないからである。

また、補足として、周波数の違いだけを学術的根拠とした教材が巷にはあふれているので、読者に注意を喚起したい。つまり、教材により、英語の周波数だけに耳を慣らしたとしても、音声の知覚プロセスでの限定的な効果が期待されるだけであり、それだけで、リスニング能力自体が向上することはない。

⁷スペイン語において、501~1499ヘルツの周波数が抜けているため、母音と子音の中間にあたる音素が存在していないと推測できる。

■ 理由4：日本人の国民性／恥の文化

一般的に、日本人は恥じらいがあり、曖昧さを好み、Yes/Noをはっきりさせないシャイな国民性／性格の傾向があると理解されている。その一見したら内向的に思われる性格が、仮に、積極的で外向的な性格であれば、より多くの会話の機会や試行錯誤の機会が得られ、必然的に英語の能力も向上していくと考えられる。実際に、筆者が海外での語学学校や大学にいた頃も、ヨーロッパや南米出身の学習者が間違いを恐れずにどんどん発言し、会話能力を伸ばしていく一方で、多くの日本人の発言量が、相対的に著しく低く、と同時に、口頭での英語運用能力も相対的に低いと言わざるを得ない状況であった。

しかし、白井(2004)、白畑(2004)は、性格と外国語能力が直接的な相関関係がないと結論づけるデータを提示しており、外向的な性格そのものよりも、「外国語で会話をするを含む」外向的行動を実際に行うことが重要であると主張している。

また、遠藤(2010)は、英語での討論会に参加することで、言語能力の向上だけにとどまらず、コミュニケーションを円滑に行う方略や知識が身に付き、他者とやりとりしようとする態度（意欲、積極性、動機付け）が高まり、普遍的コミュニケーション能力が向上する、と主張している。その能力が向上することで、英語に対する、継続的かつ意欲的な学習も助長されることが予測できる。

これらをまとめると、内向的であることは、英語の使用機会への障壁となり、間接的な遠因として、少なからず一般的に日本人が英語が苦手であることに結びついていると言える。

■ 理由5：文法偏重の中等英語教育

しばしば、文法中心、暗記中心の英語教育が批判的となるが、文法能力も暗記能力も、英語を運用していく上で必要不可欠となる能力であることは自明の理である。問題は、英語教育が、それらの能力の教授だけに“偏重”してしまっている点である。なぜなら、英語の読み書きだけで十分である時代は、とうに過ぎ去り、読み書き能力に加え、コミュニケーション能力（聞く力、話す力）を含めた4技能そろった英語能力が、求められるようになってきたからである。

そのような中等教育を受けてきた学習者は、英語での会話が苦手であることは、当然であると言える。そんな中で、中高におけるバイリンガル教育⁸の導入、小学校における外国語（原則として英語）活動の必須化などの流れがあり、音声にも焦点を当てた英語学習を開始するという方針も出されてはいる。しかしながら、新しい時代に対応した英語学習の教授法、ならびに、それを教えられる講師などの体制が整っておらず、目下、過渡期であることは間違いない⁹。

■ 5つの理由のまとめ

以上より分かることは、「もともと日本人にとって英語が苦手なのは当然である」ということである。ここで示したいことは、その事実を逆手に取り、いわば開き直りの心的態度をはじめからとっていくことで、中長期的な動機付けに役立てられるということである。つまり、日本人は簡単には英語能力が向上しないという認識のもと、忍耐強く学習を続けて行く覚悟をあらかじめ持っておくことで、中長期的な動機付けをより強固なものにできるという示唆である。

⁸ 学習対象言語を習うのではなく、その言語環境の中で、他の教科を学習することで言語能力の向上を図る教育。

⁹ 次節2.3で触れられている方略30、方略31も参照されたい。

2.3 どんな英語学習者が成功するのか？

■ 動機付け

まず、CLAメソッドなどの学習方略を利用する云々の前に、そもそも学習者の動機付けについて考える必要がある。なぜなら、前節でも触れたように、英語が公用語である国々に比べ、日本

ここまでが無料版になります。

有料完全版はコチラへ : www.eigo-manabu.jp/konyu/konyu.html

<<お問い合わせ先情報>>

- 名前： 足立 博史 (CLA英語アドバイザー)
- 住所： 神奈川県藤沢市湘南台3-8-9 ぱる湘南台101号
- 電話番号： 080 - 5475 - 07778
- メールアドレス： info@eigo-manabu.jp
- ウェブサイト： <http://www.eigo-manabu.jp>